

フランク／交響曲 ニ短調 FWV. 48

セザール・フランク（1822-1890）はベルギー生まれながら、近代フランス音楽界を牽引した作曲家である。パリ音楽院のオルガン科の教授でもあったフランクのまわりには優秀な弟子たちが集まり、フランス作曲界の一大勢力となった。そんなフランクの創作エネルギーが頂点に達したのは、実は60歳を超えてからである。有名な「ヴァイオリン・ソナタ」が60代半ばを過ぎてから、そして今回の「交響曲ニ短調」が1888年、68歳の年に誕生している。若い頃はヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして、また、パリに定住後はオルガニストとして多忙を極めながらもつねに作曲は続けていたが、この年齢になってようやく大作に取り組む余裕が生まれたものと考えられる。フランクが「交響曲ニ短調」を作曲したのは、弟子たちがフランクの名にふさわしい交響曲を書くことを願ったからだという。また、同時期にパリ初演されたサン＝サーンスの「交響曲第3番ハ短調」に感銘を受けたことも刺激となった。曲の初演は1889年2月、ジュール・ガルサン指揮、パリ音楽院管弦楽団によって行われた。フランクは弟子たちへの説明のなかで、終楽章で（ベートーヴェンの）第9（交響曲）と同じようにすべての主題が呼び戻され、新たな役割を果たすと述べている。この言葉どおり、最初の2つの楽章の主題が、最後の第3楽章でみごとに生かされるのである。循環形式とよばれる、フランクが得意とした手法であった。第1楽章：レント～アレグロ・ノン・トロppo、ニ短調 ソナタ形式。暗い色調の序奏から、快速で熱気を帯びた主部へと進む。その主題は序奏から派生している。これが2回繰り返されたあと、新しい主題があらわれる。第2楽章：アレグレット、変ロ短調 弦のピッチカートとハーブが和音の骨組みを奏したあと、メランコリックな主題旋律が現れ、イングリッシュ・ホルンからほかの楽器へと渡されていく。続いて、フランクが「ひとつの完全な曲（スケルツォ）」と説明した新たな部分にはいる。これはいわば、この交響曲で省略されたスケルツォ楽章の代用ともいえるだろう。やがてこの主題と、最初のイングリッシュ・ホルンによる主題が組み合わされる。第3楽章：アレグロ・ノン・トロppo、ニ長調 先行する2つの楽章とは対照的に、明るく輝かしい主題で始まる。途中で第2楽章はじめの主題が戻ってきて、第3楽章のほかの主題と一体になる。後半には第1楽章の主題が再現され、第3楽章冒頭の明るい主題と合流する。フランクの循環形式の頂点をなす手法である。

遠山菜穂美

楽器編成 フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット 2、バス・クラリネット、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、コルネット 2、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、弦五部 ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。